

今日もまた、私はもつとも大事なことを話したいと思う。
文化とはいったい何だろうか？

そう簡単に答えられるものではないことは解っている。

けれど、いつも、どんな時にもこの疑問を忘れないでいて欲しいのだ。

そしてどうか生涯、この問いかけを真摯に心に抱き続けて欲しいと願う。

それはたぶん、魂に、私たちの心のもつとも奥底にある謎に係わるものであるだろう。

そしてそれはたぶん、私たちが日々生きて行くことすべて、

日常生活のすべての現象に係わるものだろう。

朝の光の戯れ。風のそよぎ。季節の移り変わり。木洩れ日。自然の表情。

今、小豆島ルネサンスが始まる。

街角でふと見かけた、色鮮やかな洋服の色。はっとする美しさ。

この上もなく気持ちのいい、ゆつたりとした気分。うっとりするような匂い。

優しさ。胸を締めつける淋しさ。

身体からチリチリと、電気のようなものが抜け出していくこと……。そして激情。

ロマンチックな郷愁。憧れと夢と。

遠くからやってくる気配と、懐かしく暖かい雰囲気。

そうしたものすべて。

日々を旅する私たちが抱く、すべての激情と、言葉にならない大切なものすべて。

仔細で小さなことこそが文化である。

人を勇気づけるもの、生きる元気とエネルギーをくれるものすべてである。

これは、某美術大学の教授が自身の「ミューゼオロジー」という授業で学生に配ったテキストの一部です。文化に対する含蓄のある言葉で、まさに文化そのものを言い表しているのではないのでしょうか。人間は、文化との対話力がなくなると、精神的に死を迎えるともいわれています。以前韓国の家電メーカー、サムスン・ジャパンの李昌烈社長にお会いしたときに「サムスンの飛躍的成長のポイントは人間味とモラルの回復、そして礼節とエチケットです」と明言されたことを折に触れ、鮮やかに思い出します。昨今の企業の不祥事や政治の不安定などをみるにつけ、改めて企業活動においても文化の大切さを痛感しています。

小豆島は瀬戸内海でも二番目に面積の大きな島で、オリーブによる産業を基軸として観光の面でも栄えてきました。しかし、近年観光人口の衰え、島内からの人口流出、雇用機会の低下など、多くの課題を残しています。とくに、土庄・前島地区は、『二十四の瞳』や寒霞溪などに代表される観光ルートから外れていることやPR不足も手伝ってか、来島する観光客は決して多くはありません。しかし、エシエルロードをはじめとする豊かな自然、さらには農村歌舞伎舞台などの文化や自然を活かした資産、これから成長が見込まれる環境産業に関する資源が豊富にあるなど、経済発展の可能性は極めて高いと思われまます。

今回、縁あって、小豆島土庄町の旧戸形小学校の再生(リノベ)

ション)事業に参画しました。老若を超えて、小学校は、幼い日の原風景なのです。明治16年開校という古い歴史を持ち、目前に瀬戸内海を望む「戸形小学校」の施設を最大限に利用した再生事業「アート・ビオトープ小豆島」では、ナチュラルカフェレストランも併設されます。「カフェ」……。「何か文化的な場」の総称として使われることは、ヨーロッパのカフェ文化の中にあつたようなサロンの役割を果たしてきたことに起因しています。ここを起点として、住む人や働く人、そして訪れる人同士が交流し、何かを共有しあい、新しい関係をつくっていく……。まさにコミュニケーション・ステーションとして路地文化の再生を果たす役割を担っています。こうしたコミュニケーション・ステーションの創造は、温泉、ゴルフといった代表的観光コンテンツに代わる、小豆島の新しい観光資源の誕生になることでしょう。

平成20年小豆島は、島の象徴でもあるオリーブ植栽100周年を迎えています。記念すべき年に、「アート・ビオトープ小豆島」のオリーブが、ノアの箱舟から飛び立った鳩が、洪水が収まったことを知らせるオリーブの枝を運んできたように、小豆島に新しいオリーブの枝を運んでくれることになることを祈念してやみません。

今、小豆島ルネサンスが始まろうとしています。

アート・ビオトープ小豆島

代表 北山 ひとみ

島の風土と文化をいつくしむ

「開かれたアジール」

瀬戸内出身の私にとって、島は今も風土を象徴する、豊かなシンボルであり続けている。岡山を出て本州四国連絡橋の高架橋から眺める瀬戸の島々は無類だが、やはり、島の存在は、潮風を受けながら、高速艇やら、フェリーやらでたどりつくその静やブイ、棧橋の揺れがなければ、身体では感じられない。

むろん、そこに長く住む人にとっては、不便さや、緊急時の困難など、私たちに想像もつかない苦勞もあるわけだが、いっぽうで、均一的な開発の波にのまれた本州の主要都市、そのどこも同じような駅前殺伐たる風景はまた、島にはない。島はだから、乱暴な文明や利便化におかされ得ない、アジールといふべき文化の避難所でもあって、開かれたかたちで、私たちの憧れをつねに育み続ける。

「風土と人を、世界につなぐ」

ベネッセ直島は、そんな島の文化の特殊性を、最先端の現代アートと結びつけ、複合させながら探ろうとする卓見によって登場した文化施設として、記憶される。

だからここでは、世界的な建築家、安藤忠雄による、モダンで緊張感に富んだ、ホテルと美術館施設もさることながら、さまざまな場所に点在する、「島プロジェクト」なる、それぞれの現代アーティストが、島の町屋などの、古くからの建物や施設に絡みあって、コラボレーションしながら、永久的に残る彼らの作品をつくっていった作品群が、ユニークだ。

ジェームス・タレルと安藤忠雄、宮島達夫、内藤礼や、杉本博など、まさに世界最先端の作家たちが、今日流行の言葉で言えば、「その場に固有な」サイト・スペシフィック

ク」な作品群をつくって、後の美術館の作品収蔵や、パブリック・アートのあり方の、新しい方向性を示唆したことも、記憶に新しい。

島に滞在する作家と、それにかかわるスタッフ、そして島の人人とのコラボレーションや交流が、有意義で濃密であったこともまた、容易に想像されるのである。



そして島が何より素晴らしいのは、それらの作品に、島の風や光、そういう自然の時間を与えながら、さらに豊かなものにするからである。

アジール＝避難所、というのは、現在はずでにポピュラーになった、文化人類学的な表現だろうが、初めに読んで知ったのが、誰の文章だったか思い出せない。あるいは、畏敬する建築家、磯崎新さんだったのだろうか……。

新見隆一に「みりゅう」
武蔵野美術大学芸術文化学科教授、イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問
ギャラリー冊、アート・ビオトープ那須、顧問・キュレーター



小豆島レンギョウ

春爛漫を過ぎようとする五月の初め、寒霞溪の山中に小豆島レンギョウが咲きます。明るい里のレンギョウより遅れて咲く、緑を含んだ淡黄色の花は如何にも山の花の風情です。寒霞溪にある集塊岩の崖より垂れて、まばらな枝にまばらに花を付けていた登山道の光景が忘れられない。

山が自然の林に帰りつつある昨今、日当たりが悪くなったのか見かけなくなりました。頂上付近の観光客の少ない散策路で小さい群落が見られます。寒霞溪の頂上付近というのは吊尾根の鞍部に当たります。鞍部へ下る尾根は巾が広く日当りに恵まれ、極度の乾燥が避けられて、地質時代から此の種を此処に今日迄温存してきたのであろう。

レンギョウの仲間是一種を除いて全て東アジアの原産です。中国にはシナレンギョウとレンギョウが、朝鮮半島には朝鮮レンギョウが有り、世界的な花木であるあの、里のレンギョウはこれらの種とその改良種です。海を隔てて岡山県阿哲郡に我が国固有の大和レンギョウが局地的に分布し、更に海を隔てて小豆島レンギョウ(大和レンギョウの亜種)が残されています。同様の分布を示す植物は満鮮要素と呼ばれ大陸系の植物です。地層や化石には残らなかった小豆島レンギョウそのものの沈黙の歴史を、どなたかDNAの上に読み取っては下さらないものであろうか!?

八代田 素樹 [やしろだもとき]
小豆島・洲崎在住。

アート・ビオトープ小豆島ディレクターの「ひとりごと」 第2回

小豆島は面白い。

瀬戸内で、この島だけ地質が違うらしい。古来より、日本3大採石地のひとつであり、島独特の石組み文化もある。

そして、島固有の植物が生息している。

ショウドシマウチョウラン
ショウドシマレンギョウ

アザミ
シジミチョウ
カタツムリ ……

しかし、それらが絶滅危惧種の指定を受けている。

富田 勝彦 [とみた かつひこ]

造形美術作家。アフリカ〜アジアをフィールドワークしながら創作活動を続けている。「アート・ビオトープ小豆島」開設にあたり、ディレクターを務めている。

ビオトープとは、「生き物が生息する空間」

校庭や中庭に小豆島の植物を植え、ビオトープをつくろう。そこに集う昆虫、生物たち……

小豆島の自然を守り伝えたい。

ここに来れば、小豆島の自然と歴史がある。

そんな新しいコミュニケーションの場になれば……

アート・ビオトープ小豆島で働きませんか

- マーケット出店者募集
 - 地産のお野菜、現場調理歓迎
 - 海鮮(干物、加工品)
 - 食品(加工品)
 - 青果
 - 生花
 - 植栽
 - その他
 - スタッフ募集
 - レストランスタッフ
 - 厨房スタッフ
 - フロアスタッフ
 - 経験者歓迎
 - アート・ビオトープスタッフ
 - 企画、広報、制作
 - 学芸員資格者歓迎
- お問い合わせ先
03-6826-3550
アート・ビオトープ小豆島
東京準備事務局

美しい島、癒しの楽園

小豆島国際ホテル
予約専用フリーダイヤル
☎0120-087962
☎0879-62-2111 (代表)

“自然の恵み”
オリーブのスキンケア

小豆島ヘルシーランド(株)
☎0120-77-0000
http://www.healthylive.com/